

ウランバートル・ゲル地区における家庭菜園活動

Family Farming in Ger Districts in Ulaan Baatar, Mongolia

スレンバートル・ルヴサンジャムツ*、松宮 邑子**、三浦 敦***

LUVSANJAMTS Srenbaatar, Yuko MATSUMIYA, Atsushi MIURA

要旨

モンゴル国の首都ウランバートルは、21世紀に入って急速な都市拡大を経験している。そうした中、われわれは2008年から2014年にかけて、ウランバートル市郊外のゲル地区において家庭菜園活動をプロモートするプロジェクトを実施した。ゲル地区には中産階層の人々、「やや貧しい」貧困層、そして「とても貧しい」貧困層が住んでいるが、特にこの中産階層の人々に家庭菜園活動は評価された。プロジェクト自体は2014年に終了したが、その後も家庭菜園活動を継続する世帯が見られた。本論は、これらの世帯の、現在の状況を、簡単なパイロット調査に基づいて報告するものである。これらの継続世帯は、家庭菜園に経済的な価値や、安全な食料という価値を見出していることがわかった。今後は、より詳細な調査を通じて、彼らの家庭菜園継続の要因を明らかにしていくことが必要である。

キーワード：ゲル地区、家庭菜園、都市化

1. はじめに

本論は、モンゴル国ウランバートル市郊外のゲル地区と呼ばれる地域における、家庭菜園活動の現状を報告するものである。スレンバートル・ルヴサンジャムツの発案により、2008年から2014年にかけて、埼玉大学の教員が中心となって、ゲル地区において家庭菜園を推進する活動をおこなった。この活動は、2014年をもって終了したが、しかしその後もゲル地区では、この活動に参加した家庭を中心に、家庭菜園が自主的に続けられて現在に至っている。本論は2014年以降の彼らの活動の状況を報告し、以って今後の方向性や課題を探ろうというものである。

2. 家庭菜園の社会的意義

* ルヴサンジャムツ・スレンバートル（モンゴル人文大学日本語学部准教授・日本研究）

** まつみや・ゆうこ（埼玉大学大学院人文社会科学専攻専任講師・都市地理学）

*** みうら・あつし（埼玉大学大学院人文社会科学専攻教授・文化人類学）

家庭菜園を行うことにはどのような社会的意義があるのだろうか。

家庭菜園が一つの社会運動として普及し始めるのは、19世紀のヨーロッパにおいてである。産業革命と都市化が進む中、まずドイツにおいて都市の中下層労働者の生活改善を目指す運動としてクライン・ガルテン運動が展開した。これは、農村から出てきた都市労働者たちに家庭での野菜栽培を促進しようという運動であった。この運動はすぐにフランスやベルギーなど周辺のヨーロッパ諸国にも波及し、20世紀になると貸し農園、あるいは家族農園として一般化していった。ここで目指されたのは、農村から都市に出てきて労働者となった人々を対象に、家庭菜園という小さな空間における野菜栽培活動を通して、一方で彼らの食生活を改善するとともに、他方で、資本主義的労働規律の中で疎外されていくこれらの労働者たちに、自分たちの生活を見直し自己実現の可能性を見出す場を作ることであった。こうした活動は、20世紀後半になってさらに拡大して行く。特に、新自由主義的経済政策が展開する1980年代以降、失業者が増えていく中で、後退していく政府による社会政策を補うような形で、キリスト教会のような宗教団体や労働者組織が、家庭菜園活動を積極的に支援していくようになる。中でも特にインパクトがあったのが、「緑の爆弾 green bomb」を標語に行われた、ニューヨークのリズ・クリスティらによるコミュニティ・ガーデン運動であった。さらに今日では、都市労働者の生活改善だけでなく、失業者や就労困難者に対する社会復帰・労働参加準備のための参入農園も作られている。参入農園とは、有機野菜の栽培と直売事業によって長期失業者や最低生活保障費受給者等を、中間就労支援の枠組みで一時雇用する農園で、現在、フランスでは100程度の参入農園がNGOの主導で作られている。このように、ヨーロッパで展開した菜園運動は、社会の中の周縁的な位置にいる人々を社会の中に参入させようという運動でもあった (Fortier, 2003 : 85-86)。

モンゴルに関していえば、もともと遊牧民であるモンゴル人は、肉製品と乳製品を主体とした食生活を送ってきた。社会主義時代には小麦の栽培やジャガイモの栽培も導入されたが、本格的な野菜消費が始まるのは1990年代の民主化以降である。民主化以降の急速な経済悪化、そして特に2000年前後の雪害（家畜の大量死を招いた）後に、それまで牧畜で生活していた人々が次々と首都ウランバートルに移り住むようになり、彼らは都市の消費者となっていった。ウランバートル市は社会主義時代に大きく発展したが、彼らはその外縁部に伝統的なテント住居であるゲルで住み着き始め、やがてゲルではなく木造その他の家を建てるようになっていった（しばしばゲルはそのまま家の脇の敷地内に置かれていた）。こうして人々が住み始めた地域であるゲル地区は、ウランバートル市街の東部・北部・西部に広がっている。当初、ゲル地区では、人々は土地利用権の保証もなくそこに住み着き、また、水道も電気もなかった。しかし、ゲル地区が拡大するにつれて政府は人々に土地利用権を付与し、特に2010年ごろからは水道や電気も整備し、さらに公共交通のネットワークもゲル地区内に伸びてくるようになった。

こうしたゲル地区の発展の中で、それまで、大草原で育てた家畜を食糧源としていた人々が、都市において商品として購入される食品を食べるようになったわけだが、都市において商

品として提供される食品はしばしば、中国などの近隣諸国から輸入されるものであり、これらの国では家畜を人工飼料、さらには種々の薬品を用いて飼育・加工していたため、都市に出てきた人々が食べる肉製品や乳製品は、必ずしもかつて草原で暮らしていた時に食べていたものと同じ栄養価を持つとは言えないものであった。また、都市住民の生活スタイルは牧畜民とは異なっており、牧畜で生活していた時ほどはカロリーを必要とせず、また他方で必要な栄養素（特に、動物性タンパク質に由来するビタミンD）を含む食品を十分には購入できない場合も増えていった。

こうした背景から、ウランバートルの住民の間では、野菜食の需要が徐々に高まり、また政府や研究者たちも、人々に野菜食を奨励するようになった。しかし、社会主義時代に小麦の生産やジャガイモの生産も始まったとはいえ、もともと牧畜で生活していた多くのゲル地区住民には、野菜食の習慣も野菜栽培の経験も限られたものであった。こうしたなかで、ルヴサンジャムツ・スレンバートルは、家庭菜園活動を通して野菜食の普及を考えたのであった。

3. 活動の背景

すでに述べたように、ゲル地区における野菜栽培活動はもともと、スレンバートル・ルヴサンジャムツが、ウランバートルの緑化とゲル地区住民の食生活改善を目指して発案したもので、それを受けて埼玉大学の教員が中心となってプロジェクトチームを作り、JICA からの資金的支援（2008 年からは市民参加協力事業、2011 年からは草の根技術協力事業）を得てプロジェクトを具体化した。その際、特にターゲットとしたのは、低所得層であった。モンゴル国家統計局の報告によれば、モンゴルの貧困層はおおよそ、住居はあるが収入が低い「やや貧しい」層、収入が不安定で住居もしばしば他の人とシェアしているような「とても貧しい」層、そして住居がなく食べ物の入手に苦労している「極めて貧しい」層の3つに分けられるが（NSO, 2006: 25-26）、ゲル地区の住民の多くはこのうち「やや貧しい」層と「とても貧しい」層に属する。このプロジェクトが当初ターゲットにしたのはこのうち「やや貧しい」層である。2007 年の国連開発計画による報告では、ゲル地区では首都の他の地域に比べて貧困の割合も、基礎的インフラサービスの整備状況も格段に悪い状態に置かれており、学校での子供のドロップアウト率も高い（UNDP Mongolia, 2007: 37）。そこで、家庭菜園活動を推進することで、人々の栄養条件を改善するとともに、食費支出を減らすことで生活向上を図ることが目指された。

プロジェクトは、ウランバートル市東部のバヤンズルフ区において、2008 年に始まった。当初は、まずパイロット的に6世帯に協力してもらい、野菜栽培のための資材（ビニールハウスなど）や種子（トマト、ダイコン、ジャガイモ、ニンジン、ネギ、キャベツなど）を支給した。また野菜栽培を普及させるに当たって学校教育を通じて子供達に野菜栽培と野菜食を教えることが重要であると考え、第53学校（小学校から高校までが一つの校舎に収まっている）の理科の教員と協力することになり、第53学校にはビニールハウスを設置した。さらに野菜食の普及に当たって、学校給食に野菜食を導入することを目指して、モンゴル科学技術大学栄

養学部のエンプタイヴァン教授と、ウランバートル市第一病院のガンボルト講師に協力をあおいだ。

ついで、2011 年から、JICA から草の根技術協力事業としての資金的支援を受ける事になり、本格的にプロジェクトを実施した。2011 年には 56 世帯、2012 年には 44 世帯、そして 2013 年には 55 世帯の協力を得ることができた。プロジェクトでは、一方で参加された方を 6 つのグループに再編して、グループのメンバー同士で助け合うようお願いした。ただ、このグループ化は難しいものがあった。というのも、もともと草原の中で散居しながら移動する生活を送っていたモンゴルの人々は、都市に出てきてもあまり近隣同士の協力関係を作ることがなかったため、なかなかグループとしてまとまるのが難しかったからである。それでも何人かの人には強いリーダーシップを発揮してくださった。また、野菜栽培のためには野菜食の知識がなくてはならないということで、エンプタイヴァン教授とガンボルト講師にお願いして、毎月、野菜料理のための料理教室を開催した。こちらはかなり好評を得た。第 53 学校での学校菜園もそのまま継続して行い、こちらも先生方の熱心な関与により、大きな成果をあげた。

家庭菜園そのものでいえば、全体の結果については次のようにまとめることができる。モンゴル国家統計局の報告ではゲル地区には貧困層が住んでいるということであったが、実際には、大学卒業者が家庭内におりそれなりに安定して高い収入を持つ、中産階層（軍人、放送局勤務、大学教員など）の人々も数多く住んでいた。我々の活動では、2011 年こそ、「やや貧しい」世帯が参加世帯の中心であったが、2012 年、2013 年と、中産階層の参加世帯も増えており、しかも結果として、家庭菜園を熱心に継続していたのはこの中産階層の世帯であった。この中産階層の人々は、より野菜食の導入に積極的で、栽培された野菜を自家消費するだけでなく、さらに野菜を購入しようともしていた。これに対し低収入の「やや貧しい」世帯は、あまり継続の意欲がないか、あるいは意欲はあっても家庭菜園の活動は長続きしない傾向にあった (Miura & Surenbaatar, 2020)。こうしたことから、貧困家庭の支出を減らすという当初の目的は、必ずしも十分には達成することはできなかったが、その代わり、中産階級の間には新たな野菜食の提供という予想外の結果をもたらす結果となった。

4. 2014 年以降のゲル地区の変化

我々のプロジェクト自体は、2014 年春をもって終了した。それに伴って野菜栽培をやめてしまった世帯も多かったが、その後も継続している世帯もある。

ウランバートル市は 2010 年以降、急速な都市化の中にある。我々が活動を始めた 2008 年には、ウランバートルの中心部のほとんどの建物は 5 階建以下であったが、その後、次々と高層ビルが建てられ、高級ホテルが誘致され、ウランバートルの中心であるスフバートル広場に隣接する地区には、世界的な高級ブランドの店がいくつも軒を並べるようになった。そして、ウランバートル市の外縁部にも次々と集合住宅が作られていき、それに合わせて公共交通のネットワークも整備されていった。我々が最初にゲル地区に入った時には、ゲル地区にはバスのネ

ットワークもなく、共同井戸も限られた数しかなく、何人もの老人が水の入った大きなポリバケツをカートに乗せて、急な丘を息を切らせながら登っていく姿を見たものであったが、今では中心部に向かうバスのネットワークがゲル地区にまで延長され、ゲル地区内の各地に共同井戸が設けられ、電気も通じるようになり、生活は劇的に改善された。

とはいえ、こうした劇的な都市の近代化とともに、ネガティブな側面も忘れてはならない。もともと暖房を石炭でおこなっていたことから、盆地のウランバートルはかなりひどい大気汚染に見舞われるようになった。さらに乾燥地帯にあるウランバートル市の急激な人口増加は、水供給の問題を引き起こすことになった。また、中国資本や中国製品の大量流入も、生活水準の向上に貢献しつつも、モンゴル経済の中国への過度の依存や、汚職などさまざまな問題を引き起こしている。

ここで、我々が活動した地域でのその後のゲル地区での家庭菜園の状況を、ウランバートル市の都市化の状況との関連で見よう。

図 ウランバートル市の人口動態（人口国勢調査による）



Тайлбар: *Гадаадад 6, түүнээс дээш сарын хугацаагаар оршин суугаа Монгол Улсын харьяат иргэдийн тоо орсон дүнгээр тооцов.

注：海外6カ月以上滞在中のモンゴル国籍を持つ者が含まれる

2022年現在、ウランバートル市の総人口は、1,539,810人、世帯数は411,420モンゴルの全世帯の45.8%が首都ウランバートルに住んでおり、前回の国勢調査より2.2ポイント多い。過去の人口変化を見ると、1970年代からコンスタントに人口が増加し、特に2010年ごろに急速に増加したことがわかる。2020年度国勢調査によると、ウランバートルのゲル地区には411.4千世帯が住んでおり、住宅種類別で22.2%がゲル地区の伝統的なゲル住まい、77.3%が一軒家、0.5%がその他のタイプになっている。

現在、ウランバートル市の60%以上の住民がゲル地区に住んでいる。ゲル地区の住宅再開発事業は2011年より開始され。現時点で15,000戸の集合住宅が完成された。近年、住宅再開

発事業として 4,500～6,000 世帯に住宅を提供するという政策がある¹。さらに、ウランバートル市郊外ゲル地区開発政策では、地方分権化、渋滞の緩和、貧困の削減などを考慮した上、既存のゲル地区エリア近隣の土地を再計画し、より広い範囲で住宅工事を強化するとされている。ウランバートル市の衛星都市計画によると、現在のバヤンホシュー、セルベ、ダンバダルジャー、デンジイン、ウリアスタイ、シャルハドの各ゲル地区を、ウランバートル市の衛星都市中心エリアとして、近代的なインフラ整備が実施される予定である。エンジニアリングネットワークが届かない郊外ゲル地区では、居住者らが敷地内で快適に暮らせる機会を提供する再開発策を実施するという。

こうしたゲル地区の再開発策の一環として、今年、郊外に低所得者向けの住宅を建設し、土地の価値を高める事業が実施される。本事業は、世帯数が最も多いバヤンズルフ区とソングノ・ハイルハン区の 6 か所で実施される。これらのゲル地区では、敷地内に樹木を植えるだけでなく、敷地外にも緑地をつくることにより土地の価値が上がり、自分のゲル地区敷地内で元気に暮らしたいと考える人が増加するだろうと期待されている。そして、家庭菜園は、こうしたゲル地区の再開発政策の一環の中に位置づけることができるものである。

COVID 発生後の経済不況、物価の高騰、失業増加、食糧安全問題などの課題は、他の世界の国々と同様にモンゴルの人々をも困難な状況においている。こうした状況の中、ゲル地区居住者たちは、従来通り、劣悪な居住環境、大気汚染、水道設備の欠如による地区内の給水所までの毎日の水の運搬に、大きな不満を抱いている。

5. ゲル地区住民における野菜栽培の位置付け

今回、埼玉大学の野菜づくり事業の参加者 13 世帯を対象として、事業終了後の野菜栽培活動について簡単な聞き取りによるパイロット調査を行った。その結果、興味深い共通点が見られることがわかった。

彼らは、ウランバートル市中心部に近いゲル地区に住む人々よりも、より広い面積のゲルに暮らし、平均月収も遠方のゲル地区よりも高く、ウランバートル市内の平均である 700 m²程度の土地を所有する世帯が大部分を占めている。また、対象世帯で野菜栽培作業を行っている人々は年金生活者が多く、彼らにとって野菜づくりは健康的で経済的な価値のある行為となっている。さらに、彼らの大半は、敷地内に家族で力を合わせて簡素な木造住宅を建てるだけでなく、毎年それを少しずつ改造して住みやすいレンガ 2 階一戸建てに造り上げたり、市内の集合住宅ではなく市外のゲル地域から 20 年以上前に現在の地に移り住んだりした世帯が多い。彼らはゲル地区について、集合住宅より家族で自由に使える土地があり生活上の制約が少

¹ 2020—2025 年都市計画プラン

ないという長所を指摘している。

彼らによれば、今後の家庭菜園の意義として下記の点があげられる。

1. モンゴル産野菜（特にキュウリ、トマト、ネギ、レタス）の値段の高騰や、COVID 発生後の全般的経済不況による物価高騰などを乗り越えるための経済的な意義。
2. 食の安全の確保という意義。特に今年の 10 月にモンゴルにおいて、ウランバートル市郊外にある Emeelt 周辺に集積する食肉加工工場（その大半は中国系企業）で、食肉保存のための大量の化学薬品の使用が明らかとなり、大きな社会問題となった。この事件発生後、人々の食の安全への意識が一層高まり、市内では肉類も野菜も大きく売り上げが落ち、自分の手で健康な野菜をつくり、親戚か信頼できる知り合いから食肉を買いたいという人が増えた。
3. 余暇活動としての意義。ゲル地区住民の多くは、休日にも外出する時間は短く、家族で買い物や観光旅行に行くといったことも少ないため、自宅敷地内の野菜づくりは効果的な余暇の過ごし方となっている。
4. 自然に触れるという意義。特にゲル地区の子どもたちにとって、家庭菜園は敷地内で自然に触れる貴重な機会となっており、また、敷地内での緑化としても意義を持つ。
5. 新たな収入機会としての意義。収入の不安定なゲル地区住民にとっては、野菜栽培は新たな仕事づくりとしての意味を持ちまた、収穫した野菜を売ることによって収入源を増やす可能性がある。

6. まとめ

野菜栽培プロジェクトは 2014 年に終了したが、その後も栽培の努力を続けている家庭があったことは興味深い。今回のパイロット調査のデータだけでは検証することはできないが、プロジェクト終了時の評価と同様、おそらく中産階層の世帯が、こうした継続世帯の中心となっていると考えられる。

今後は、こうした継続世帯が、プロジェクト終了後にどのように野菜栽培を継続してきたのかを、彼ら彼女らのこの間の職業的経済的変遷や、地域での社会関係のネットワークの変遷、さらには食生活の変化と合わせて検討することが、彼らが野菜栽培を継続しようと思った要因、および野菜栽培が継続できた要因を明らかにするに当たって重要となるだろう。

参考文献

Miura, A. & Surenbaatar L. (2020), Vegetable Production among Suburban Dwellers in Ulaanbaatar, 『埼玉大学紀要（教養学部）』 55(2): 227-235.

NSO (National Statistic Office of Mongolia) (2006) *Participatory Poverty Assessment in Mongolia*,
Ulaanbaatar

UNDP (United Nation Development Programme) (2007) *Employment and Poverty in Mongolia: Mongolia Human Development Report 2007*, Ulaanbaatar.

- ・収穫したトマト、キュウリは自給自足として使う
- ・キャベツとトマトなどを加工して余った分を売った
- ・来年、栽培量を増やす

・来年はナス、玉ねぎ、イチゴ、ニンジン、ジャガイモを栽培する

- ・来年は質の良い種を使う
- ・栽培した野菜は自給自足として使う
- ・良い種が見つかったらキュウリ、ピーマン、長ネギ、ニンニク、カボチャをつくりたい

- ・野菜栽培に関するプロ指導が必要である。知識不足のためうまくできないことがある。
- ・また、質の良い種が大事である。種についていろいろ教えてもらいたい。
- ・野菜ハウスをつくりトマト、キュウリ等を栽培したい。

世帯 5

住所： バヤンズルフ区 24 ホロー

露地面積： 26m² ハウス面積： 16 m²

栽培野菜： ブロッコリー、キュウリ、トマト、白菜

栽培果樹： ウフリースド、Nohoin hoshuu

野菜づくりの現状・課題と今後の予定計画

- ・野菜を売って収入にすることができた。自分の手で作った安全な野菜が食べられる。
- ・野菜づくりの大きな課題は水である。

世帯 6

住所： バヤンズルフ区 13 ホロー

栽培面積： 30m² ハウス面積： 22.5m²

栽培野菜： ブロッコリー、豆、レタス、タマネギ、ジャガイモ、アニス、スグリ、nohoin hoshuu

野菜づくりの現状・課題と今後の予定計画

- ・野菜ハウス内のキュウリがよく育っていた
- ・野菜づくりの課題と今後の予定計画
- ・ブロッコリー、豆、レタス、ほうれん草、シナモン、パセリ、アニス、ビーツ、ニンジン、タマネギ、ニンニクを栽培する。
- ・自分の手で作った新鮮な野菜は子供たちに食べさせてあげる。
- ・薬草を栽培してみたい。
- ・土壌・肥料づくりがうまくできない。質の良い種は重要である。

世帯 7

住所： バヤンズルフ区 24 ホロー

栽培面積： 25m² ハウス面積： 24m²

栽培野菜： キュウリ、トマト、ジャガイモ

野菜づくりの現状・課題と今後の予定計画

- ・野菜栽培に関する課題として給水・土壌づくりは大変である。
- ・来年、野菜畑を広げて、栽培種類を増やす予定がある。

世帯 8

住所： バヤンズルフ区

栽培面積： sic

ハウス面積： sic

栽培野菜： ニンジン、カブ、ブラウンビーツ、

栽培果樹： モイル、ウフリースド、Chatsargana

野菜づくりの現状・課題と今後の予定計画

- ・野菜料理の教室に行きたい。
- ・ナリーン ノゴ（キュウリ、トマト等）の栽培技術を知りたい。
- ・野菜作りに関して困ったこと、課題はあまりない。

世帯 9

住所： バヤンズルフ区 第 13 ホロー

栽培面積： 32m² ハウス面積： 12m²

栽培野菜： トマト、キュウリ、ほうれん草、ブラウンビーツ、レタス、ジャガイモ、ニンジン

栽培果樹： ウフリースド、Chatsargana

野菜づくりの現状・課題と今後の予定計画

- ・健全な野菜を作って、自分たちの食事に使う。
- ・来年、野菜名と種類を増やしたい。
- ・野菜栽培に関する問題はない。

世帯 10

住所： バヤンズルフ区 第 5 ホロー

栽培面積： 288m² ハウス面積： 120m²

栽培野菜： キュウリ、ブラウンビーツ、レタス、ジャガイモ、ニンジン

野菜づくりの現状・課題と今後の予定計画

- ・ JICA の野菜プロジェクトで、野菜作りに関してたくさんのことを教えてもらった。
- ・ 自給自足として栽培した野菜を使っている。来年も野菜を栽培する。
- ・ 大量で栽培したいが、人手がたりない。
- ・ 野菜栽培に関して大した課題はない。